

## 談話構成と表現法の日英語比較：

談話標識 *now* と *and* を例に

松尾文子

This paper explores how discourse is constructed and how discursial relations are expressed in English and Japanese: by giving the examples of discourse markers *now* and *and*. In some cases, *now* and *and* are not translated into or expressed in Japanese. Japanese is a high-context-dependent language, in other words, context or unexpressed information shared by writers and speakers plays a more significant role in Japanese than in English. This can cause the differences in discourse construction in English and Japanese.

キーワード： 日英語比較 談話標識 談話構成 *now* *and*

### 1. はじめに

本論は、英語と日本語の談話標識を対照研究することで、両言語の談話構成や表現法の特徴と談話標識の機能の一端を明らかにしようとする試みである。

談話標識は、話し手の態度の表明、対人関係調整、テキスト構成など多くの機能を持つ。<sup>1</sup> 談話標識はその名の通り談話の文脈において用い、解釈されるので、翻訳が困難である。いずれの談話標識も、基本的には先行の談話（発話）、あるいは当該の発話がなされる状況と後続の談話（発話）を何らかの形でつなぐ役割を果たす。談話標識では英語と日本語が対応しない場合があるが、そこに日英語それぞれの接続の表現のしかたや談話の構成法の違いと特徴が反映される。

本論では談話標識の *now* と *and* を取り上げ、英語にはあるが日本語では表現されない場合を検討する。今回の試みは二語のみを対象としているに過ぎないが、今後日英語の談話標識をより広く比較検討することで、両語の表現法の相違点が明らかになると考える。

なお、書き言葉に関しては書き手・読み手、話し言葉に関しては話し手・聞き手と

いう用語を用いる。また、書き言葉でも話し言葉でも「談話」という用語を用いる。資料は、下記の作品から得た。〔 〕内は本論文での略号を示す。

原著が日本語で翻訳が英語：『バカの壁』（養老孟司）【著者の話を編集部が文章化したもので、話し言葉的な要素を持つ書き言葉】〔壁〕

原著が英語で翻訳が日本語：

*The Sky Is Falling* (Sidney Sheldon) 〔*Sky*〕

*If Tomorrow Comes* (Sidney Sheldon) 〔*Tomorrow*〕

*The First Miracle* (Jeffrey Archer) 〔*Miracle*〕

*Skiping Christmas* (John Grisham) 〔*Christmas*〕

例文は、原著の言語を先に挙げる。

## 2. now

### 2.1 基本的用法

談話標識の **now** は時を表す副詞と密接な関係を持つ。時間の副詞として「現在時」を表すのが基本で、「現在時」が状況によって物語中の「現在」に拡大され、未来形や過去形、完了形とともに用いられることがある（小西 p.1240）。

談話標識として用いられると、「現在時である今」に焦点が置かれることから、**attention marker** として聞き手の注意を引く機能を持つ。それにより話題の転換や新たな情報の導入の合図となったり、話し手がこれからしようとしている行動に聞き手の注意を向けさせる。Aijmer(2002)が言うように、他の談話標識と比べて、何かを議論するようなテキストや叙述において頻繁に用いられる。<sup>2</sup>

### 2.2 局面移行：書き手の主張導入の合図

会話で聞き手の注意を引いて話題を転換したり、話を切り出すために用いられる **now** は、多くの場合「さて、ところで」などと訳される。話題の転換も切り出しも、一連の会話において新たな段階に入ることを示すが、書き言葉でも同様に新たな段階に入り局面が移行する合図となる。

書き手が論を進めて行く際に、まず主張を述べ、それに付随する情報として例示や詳述、説明がなされ、再び主張へと戻る場合がある。再び主張を提示するときに **now** が用いられるが、日本語では表されないことが多い。

(1) つまり、真に科学的である、というのは「理屈として説明出来るから」それが絶

対的な真実であると考えることではなく、そこに反証されうる曖昧さが残っていることを認める姿勢です。[…例示…(略)]

このような物言いは誤解を生じやすく、「それじゃあ何も当てにならないじゃないか」と言う人が出てくる。しかし、それこそ乱暴な話であって、まったく科学的ではない。

In other words, to be truly scientific, you cannot observe that something is an absolute truth just because ‘it can be explained in theory’ : you must be able to admit the possibility of the theory being proved false. […]

Now this way of talking can cause misunderstanding, and you get people saying, “So, nothing is reliable.” But to me it's a very irrational remark, not at all scientific.— [壁]

(1)では科学的であるとはどういうことかについて述べられている。まず書き手の主張が述べられ、それに関する例が提示され、now で直前の談話との境界を明示して再び主張に戻る。最初の主張で用いられた「科学的」(scientific)(波線を施している)という語が、再び戻った主張でも用いられていることに注意されたい。

次例も同様に、二度の主張で同様の表現が繰り返されている。

(2) 大体、現代社会において、本当に存分に「個性」を発揮している人が出てきたら、そんな人は精神病院に入れられてしまうこと必至。

想像してみればおわかりでしょう。人が笑っているところで泣いていて、お葬式で泣いているところで大笑いしてしまうような人。それで「どうして」と聞かれても理由が答えられない。

明らかに他の普通の人たちとは違う、「個性」を存分に発揮しています。しかし、そんな人がいたら、それはたちまち病院に送られてしまうこと必至です。

精神病院に行けばまったくもって個性的な面々揃いです。

Generally speaking, in modern society, anybody who shows off their ‘individuality’ to the full will get put into a mental hospital. This is obvious. For example, what else can you do with someone who cries when everybody else is laughing, or laughs loudly at a funeral when everybody else is crying and can't give an answer when they are asked why they do it? The way they freely show their ‘individuality’ is definitely different from the way most of us behave.

That's why it's inevitable that they will immediately be taken away to a mental institution.

Now if you pay a visit to one of those institutions, you will see a lineup of very striking personalities.— [壁]

(2)では書き手はまず、個性的すぎる人は精神病院に入れられると主張し、それに関する補足説明をし、*now* で新たな談話単位が始まることを明示して再び精神病院のことを述べている。「個性」(individuality, striking personality)、「精神病院」(mental hospital, those institutions)が繰り返されている。

話し言葉では先の話題に戻る合図として *now* が用いられることがあるが(Leech & Svartvik p.325)、その場合は通例「さて、ところで、それで」のような訳語が当てられる。書き言葉では(1)(2)のように先の主張に戻って主張を繰り返す場合に *now* が用いられるが、日本語では表現されないことが多い。

次例は同じ主張が繰り返されるのではなく、日本語の原著にはない説明を加えたあと、*now* で書き手の主張が示されている。

(3) 脳の中で首を境に身体が分断されている、という事実から考えると、「クビを切る」という表現には象徴的な意味があるように思えます。

There are many expressions for losing your job in English, including being fired, getting the boot, being sacked and getting the axe. But in Japanese, we use *kubi o kiru*, which literally means ‘to cut the neck’ or ‘behead.’ Now, if you think about that from the brain's point of view of the body being divided at the neck, then the expression seems to take on a symbolic meaning.— [壁]

(3)では、翻訳では原著にはない「クビを切る」という日本語の表現と英語での相当表現の説明が提示され、*now* 以下で書き手の主張が述べられている。*now* によって語りの局面が移行することを示し、書き手が伝えたい内容に注目させることになる。

### 2.3 局面移行：メタコメント導入の合図

*now* は談話内容に対する書き手自身のコメントや解釈、すなわちメタコメントを導入する。この場合の *now* は日本語では表現されにくい。「さて、ところで」のような訳語は合わない。書き手自身の主観的な意見や評価を示すことから、しばしば **I think**

や *that's awful* のような表現と共起する (Aijmer pp.62, 74, 87, 95; Schiffrin 1987, p.245)。

(4) すると、今度はそれをいじって、猿の脳をもう少し増やしてやったらどうなるのか、さらには人間の脳を今の三倍にしたらどうなるのか、という興味が自然に湧いて来る。

ある種の「超人」を作ったらどうなるのか。これは非常に興味深いテーマです。

What will happen if the size of a monkey's brain is increased a little? What will happen if a human's brain is made three times the size it is now? And how about creating some kind of 'super-human' ?

Now I think this is a very interesting theme.— [壁]

(4)は遺伝子操作の結果に関して述べているが、操作によって「超人」を作ることに対して、書き手は「興味深いテーマである」とコメントしている。コメントは英語では *now* に導入され *I think* が共起している。

次例でも *I think* が用いられている。

(5) そこのお百姓さんに、「あれ、何ですか」と聞いたら、「お宅と同じで、幼稚園の芋掘り用の畑ですよ」「だけど、全部、しおれているじゃないですか。どうしてですか」「あその幼稚園用の芋は、子どもが引っ張ったらすぐに抜けるように最初から掘ってある。一遍、掘って埋め直してあるからしおれているんだよ」

これでは詐欺です。

I asked the farmer, "What goes on in that field?" He answered, "Well, like your field, kindergarten kids come and dig up the potatoes." "OK, but why are all the leaves drooping?" I replied. "Oh," said the farmer, "the potatoes in that field have been dug up first so that the children will be able to pull them up easily. The leaves are drooping because they've been dug up once and planted again!"

Now I think this as a form of deception.— [壁]

(5)では幼稚園の芋掘りに関する事柄が述べられ、それに対して書き手は「詐欺だ」とコメントしている。コメントは英語では *now* に導入されている。

次は now とともに I find が用いられている例である。

- (6) 私が、一時間目の講義に行くと、既に机の上に突っ伏して寝ている学生が結構いるのです。放っておいて一時間半講義してもまだ寝ている。一度も目を覚まさない。これがなかなか理解できない。

When I enter the classroom for the first lesson in the morning, I am met by the sight of quite a lot of students sleeping like a log with their heads down on the desk. I leave them alone, and they are still asleep even at the end of my ninety-minute lecture. They never wake up at all!

Now I find that quite hard to understand.— [壁]

- (6)では書き手の大学での一時間目の講義の様子の記述があり、それに対する書き手のコメント「理解できないことだ」が述べられている。

次例では、now とともに you may think という書き手の推測を示す法表現が用いられている。

- (7) 昔の人は、学ぶ、学問するとは、実はそういうことだと思っていた。だから、君子は豹変した。男子三日会わざれば…だった。

これに一番ふさわしい言葉が『論語』の「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」。道を聞くというのは、学問をして何かを知ることです。

朝、学問をして知ったら、夜、死んでもいいなんて、無茶苦茶な話だ、と思われるでしょう。

In the past, people thought that learning and studying were in fact that kind of thing—that is why a wise man's mind would change. ‘If you don't see each other for three days…’ was a very realistic kind of comment.

Here's an appropriate expression from *The Analects of Confucius*:

*Ashita ni michi o kikaba, yube ni shisu tomo ka nari*

If a man learns the Way in the morning, he can die in the evening with no regrets.

*Michi o kikaba* comes from the verb *michi o kiku*, meaning ‘to study and learn something.’ Now you may think it's nonsense to state that you wouldn't mind being dead in the evening if you had studied and learned in the morning.

— [壁]

(7)の構造は(4)～(6)とは異なる。書き手は自らの主張をするために『論語』を引用し、『論語』の言葉を補足説明した上で、コメントを述べている。英語では『論語』の引用を英訳し、それをさらに補足説明した後に、now 以下で話し手のコメントが示される。

#### 2.4 局面移行：背景的情報導入の合図

now は、今述べたことに関する説明や詳述、付随情報などの背景的情報を導入する場合に用いられる (Aijmer pp.57, 74, 85; Biber *et al.* p.1088; Quirk *et al.* p.1470)。この場合も、日本語では表現されにくい。

(8) おそらく彼(ピカソ)は意識的に、絵を描く際に、ノーマルな空間配置の能力を消し去ったのです。ピカソはそれを意識的に行っていた。病気になると、ある能力が消えて、ひとりでのピカソの絵みたいなものを描くケースがありますが、ピカソ自身は健康なのに意図してああいう絵が描けた。

Instead, it seems probable that he intentionally erased the normal spatial arrangement of objects from his mind as he worked. He did it consciously. Now sometimes when people fall ill, some normal ability disappears and they automatically start drawing rather like Picasso. But Picasso, despite being healthy, had the ability to produce such works intentionally.— [壁]

(8)では画家のピカソに関する記述がなされているが、「病気になると…ケースがありますが」の部分が付随情報で、それ以降再びピカソに関する記述に戻る。日本語では付随情報と本筋の記述が一文となっているが、英語では付随情報が now に導入された独立した文となっている。

次例では、日本語ではカッコに入れられて傍白的になっている箇所が、英語では now に導入されている。

(9) [科学的に脳を測定可能になったという趣旨の文…] CT とか MRI とかそういう装置の場合、子供におとなしく受けさせるのは大変な骨なのです。

この装置を赤ん坊につけてみる実験がフランスで行われた（どうも、この種のことをする場合、日本では何だか親などが色々とうるさいようです。）すると、こんなことがわかりました。テレビのニュースで母国語が流れているのを聞くと、赤ん坊

でもちゃんと、言語を司る左脳に血液が集まっているというのです。

…; in the case of CT or MRI equipment, it's no easy task to keep children still during the examination.

Now I hear that Japanese parents can become a bit of bother if you try to conduct this type of experiment on their young children, but an experiment was carried out in France using this infrared equipment for babies. It was discovered that even when babies hear their mother language on the TV news, flood concentrates in the left side of their brain that controls language reception.—

[壁]

(9)では本筋である脳の測定に関する記述がなされ、カッコ内で付随情報が提示され、再び本筋に戻っている。英語では付随情報は *now* で導かれ、かつ日本語とは文の順番が入れ替わっている。

## 2.5 grammatical change

*now* はその前後で grammatical change (switch) が起こることを示す。たとえば、平叙文から疑問文への文の形の変化や、過去時制から現在時制へといった時制の変化である (Aijmer p.74; Schiffrin 1987, p.240)。これもすなわち、談話進行上の局面の変化を合図しているのである。

次例では、平叙文から疑問文への切り替えが行われている。

(10) (ある夫婦の妊娠から出産までのドキュメンタリー番組の)ビデオを見た女子学生のほとんどは「大変勉強になりました。新しい発見がありました」という感想でした。一方、それに対して、男子学生は皆一様に「こんなことは既に保健の授業で知っているようなことばかりだ」という答え。同じものを見ても正反対といってもよいくらいの違いが出てきたのです。

これは一体どういうことなのでしょうか。

Most of the girls said something like: “It was so educational. I found out a lot of new things.” The male students, however, disagreed: “We've already studied this in our health education classes.” They had all watched the same program, but the responses of the girls and boys could hardly be more different.

Now why do you think this is?— [壁]



(10)では、ビデオに対する女子学生と男子学生の反応の違いに関する記述がなされ、それに対して now を境に書き手は読み手に疑問文で問いかけをしている。

次例では、now を介して時制の変化が行われている。ただし、この場合の now は通例「今、今や」と訳される。

(11) She had to think of the baby. She had read of women having babies in prison, but the stories had been so remote from her own life that it was as though she were reading about people from another planet. Now it was happening to her.

赤ん坊のことを考えなければならない。刑務所で出産した女性の話を聞いたことはある。そんなのは自分とかけ離れた、どこか遠い別の惑星での出来事だと思っていた。ところが今、自分が当事者になったのだ。— [Tomorrow]

(11)は過去時制で始まり、第二文から過去完了形、now で再び過去時制に戻る。now が過去時制で用いられる場合は、narrative time に言及し、now は ‘marker of a personal narrative situation, personal point of view’ となる (Aijmer p.58)。

### 3. and

#### 3.1 基本的用法

and の基本的な意味は、「付加」である。「付加」の意と等位接続詞という構造上の(文法的)地位が結びつくことによって、談話標識としての基本的機能である ‘continue a cumulative set’ が生じる。たとえば、and に導かれる疑問文の場合、and は概念 (idea) レベルでは命題を、スピーチアクトレベルでは質問を、言葉のやりとりの (exchange) レベルではターンを続けることになる (Schiffrin 2006, pp.322, 333, 335)。<sup>3</sup> このように談話標識として用いられると、後続の談話が先行の談話と何らかのつながりを持っている合図として機能するが、単に二つの談話単位をつなぐだけではない。会話の進行や会話における話し手の交替の観点から考えると、Schiffrin (1987:128)の言うように、“it (=and) continues a speaker's action” という特性を持つ。Cerce-Murcia & Larsen-Freeman (pp.4724-25)にも marker of speaker continuation とあるように、談話構成や談話進行に対する話し手(書き手)の強い関与が感じられる語である。<sup>4,5</sup> また、聞き手(読み手)の注意を引く attention marker としても機能する(Fraser p.896)。

## 3.2.1 書き手の主観的関与・心的態度表明の合図

基本義からすると **and** は通例「そして、それで」などと訳されるが、談話標識として用いられる場合、日本語では必ずしも表現されるとは限らない。

談話を進めて行く際に、まず書き手の主張が示され、続いてそれに関する付随情報や例示がなされ、さらに **and** で再び書き手の主張が提示されることがある。この **and** 自体は日本語では表現されないことが多い。接続語的な日本語は用いられないが、しばしば文末が「ノダ」体となる例が見られた。内田(p.245)は、「(ノ)ダ」には話し手の主観的関与が認められるとする。

(12) a. 太郎が窓ガラスを割った。

b. 太郎が窓ガラスを割ったのだ。

(12a)は「太郎が窓ガラスを割った」事実を描写し、伝える発話であるのに対し、(12b)は「太郎が窓ガラスを割った」ことを話し手の責任で判断して伝える発話である。また、名嶋(p.21)も、「ノダ」は聞き手が認識していないことを教えよう、知らせようという話し手の聞き手に対する心的態度を表すとする。<sup>6</sup>

**and** が「ノダ」文で用いられるということは、**and** が導入するのは単なる記述や描写ではなく、書き手の強い主張であり、書き手の心的態度が表されていることになる。**and** の持つ心的態度を表すニュアンスが文頭ではなく文末で示される。ここに日英語の表現形式の違いがあると言えるのではないだろうか。

このように、英語では **and** が書き手の強い主張を導入するマーカーとなっている。例を挙げる。

(13) もう少し「わかる」ということについて考えを進めていくと、「そもそも現実とは何か」という問題に突き当たってきます。「わかっている」べき対象がどういうものなのか、ということです。ところが、誰一人として現実の詳細についてなんかわかってはいない。

[…付随情報や例示…(略)] そこに怖さがあるのです。

If we pursue this idea about ‘understanding’ a bit further, we come up against the issue of ‘reality’, or in other words, what is it that you are claiming to ‘know’ all about?

… And that way danger lies.— [壁]

(13)では「わかっているべき現実」とは何なのかという問題提起がなされ、それに対して現実をわかっている人はいないという事実が語られる。続いてそれに関する付随情報や例が提示され、and 以下で書き手の主張が示される。ここで「ノダ」体が用いられている。

同様の例を見る。

(14) 2つ前の章に「科学は絶対的ではない」という主張 / 地球温暖化の例 / 進化論の例 / その時に科学を絶対的なものだという風に盲信すると危ない結果を招く危険性があるのです。

And on those occasions, there could be dangerous consequences if we believe blindly that science is the only thing that counts.— [壁]

(14)ではまず、「科学は絶対的ではない」という書き手の主張が述べられ、続いて2つの例が示され、最後に and 以下で書き手の主張が示される。ここでも「ノダ」体が用いられている。

### 3.2.2 書き手のコメント導入の合図

日本語の文末が「ノダ」体にはなっていないが、3.2.1 で述べた例と同様に、and が書き手のコメントを表す談話を導入するマーカーとなっている。内容としては、評価を表すものが多い。

例を挙げる。

(15) 経済を「実」と「虚」に分ける考え方は、どこかこれまでに述べた「意識と無意識」「脳と身体」「都市と田舎」といった二元論に似ていることに気づかれたかもしれません。その通りで、私の考え方は、簡単に言えば二元論に集約されます。

You must have realized that the division into true economics and empty economics is like other forms of dualism, such as ‘consciousness and unconsciousness’, ‘brain and body’ and ‘city and countryside.’ And you are right. Simply speaking, my view is that it all comes down to dualism.— [壁]

(15)では、日本語の「その通りで」が英語では“And you are right.”と独立した文に

なっている。

(16) この話（医学部の学生が頭蓋骨を見ても何も分からないという話）をしても、「それはそういう学生もいるよ」で済ませる教師も大勢いるのが現状です。しかし、私の場合は、結構、こんなことがこたえてしまった。「えっ？ 俺が教えているのはこういう学生なのか…」とショックを受けてしまった。

Hearing about this episode with the skulls, many teachers come to the same conclusion: “Well, yes, there are students like that out there.” *And* that's it. But in my case, that experience really hit me hard. It shocked me into thinking: “What? Am I teaching students like that?” — [壁]

(16)では、“And that's it.”に相当する文章自体が日本語にない。andに導かれるのは“that's it.”「それだけのことです、それでおしまいってことです」の意で、書き手の呆れた気持ちが表されている。

### 3.3 話法転換の合図

andは話法転換のマーカークの機能を持つ。Aijmer (p.88)によるとandによって直接話法を導入することができるが、実際に導入される話法は直接話法だけではない。この場合のandは日本語では表現されない。

まず、話法の種類を簡単に見ておく。例文は全て、Asher *et al.* (p.4298)による。

- ① 直接話法 : She said, ‘You must bring your poor little cat here now, you must!’
  - ② 間接話法 : She insisted that he should bring his poor little cat there immediately.
  - ③ 自由間接話法 : He must bring his poor little cat here now, he must.
- 直接話法と間接話法の間接的な話法で、バリエーションが多く、自由間接話法を文法的・語彙的に明確に区別することは困難である。描出話法など他の呼称もある。通例、思考（意識の流れ）を表す。
- ④ 自由直接話法 : “Do you love me, Charles?” She was five hundred miles away in Los Angeles when she asked him.

伝達部のない直接話法である。

- ⑤ 中間話法(日本語) : ダイクシスは直接話法的、主観的要素（間投詞、話者の主観や感情を表す表現）は間接話法的な扱いをする。準直接話法と呼ぶ方が適切であ

る(松尾 1996)。

日本語は英語ほど話法を明確に区別できない。特に直接話法と間接話法の区別は曖昧で、中間話法の形式が用いられることが多い。また、日本語は英語に比べて〈発言者〉、すなわち引用される発話や思考を発した本人の視点を取る直接的な表現を好む。したがって、語りの地の文に、突然登場人物の言葉や思考が入り込むことが多々見られる。談話において視点を自由に移動させることができるのが日本語の特徴である。詳細は松尾(1996)を参照されたい。

一方、英語では日本語ほど視点の移動が自由に行われないので、and を合図にして話法の転換が行われる。例を挙げる。

(17) Nora suspected many would secretly over their cruise.

And in three months who'd care anyway?

しかし、この（反対派に属する後者の）グループのなかにも、心ひそかにクルーズ旅行を羨む者はすくなくないだろう、とノーラは思った。

第一、三か月もすればみんな忘れてしまうに決まっている。— [Christmas]

(17)の例で、英語では前文で Nora に関する記述がされ、and によって、語順は直接話法を保持し時制のみが間接話法的になっている自由間接話法が導入される。談話標識の anyway も直接話法の要素である。

次も、自由間接話法の一つが導入される例である。

(18) “Take a cruise,” Yank mumbled. “Can't think of anything worse. Socked away on a boat with Abigail for ten days. I'd pitch her overboard.”

And no one would blame you, Luther thought.

「クルーズ旅行に出ろ、か」ヤンクはぼそりとつぶやいた。「それ以上の悲惨な事態は想像もつかないな。十日間もアビゲイルとおなじ船に閉じこめられるなんて。そんな目にあったら、女房を手すりから海に突き飛ばしちまいそうだ」

そうであっても、だれもきみを責めたりするものか—ルーサーは思った。— [Christmas]

(18)では、間接話法ならば “Luther thought that no one would blame him.” とすべきところを、ダイクシスは直接話法の要素を残し、伝達部も直接話法的に付加され

ている自由間接話法の一種である。前文の直接話法から **and** を合図に話法の転換が行われ、ルーサーの思考が導入されている。

次も同様の例である。

(19) They drove along avenues heavy with motor traffic and forlorn pedestrians hurrying along the frozen streets. The city seemed overlaid with a dull, gray patina.

And it isn't just the weather, Dana thought.

車は走りだした。道は行き交う車で込んでいた。歩行者は少なく、凍てつく道を肩をすぼめて早足で歩いていた。街を形づくっているのは、白い雪以外は、灰色の重苦しい建造物だけである。〈これは決して景色だけじゃないわ〉ダナの実感だった。  
— [*Sky*]

間接話法ならば “Dana thought that it wasn't just the weather.” とするべきところを、時制は直接話法の要素を残し、伝達部も直接話法的に付加されている自由間接話法の一種である。前文では街の描写がされていて、**and** を合図にダナの思考が導入されている。

次は、自由直接話法が導入される例である。

(20) “Would you like to have a nightcap at my apartment?” … “Thank you, Tim. But no.” “Oh.” His disappointment was obvious. “Maybe tomorrow?” “I'd love to, but I have to be ready early in the morning.” And I'm madly in love with someone else.

「ぼくのアパートに寄って一杯やっていきますか？」 … 「ありがとう、ティム。でもお断りするわ」「やっぱりだめですか？」彼は失望を隠そうとしなかった。「じゃ、もしかしたら明日はどうですか？」「明日は朝早くからいろんな準備があるの」〈それよりも、わたしの心はある人に捧げたままなのよ〉 — [*Sky*]

(21) “She has no one, darling. She's all alone and panicky. She won't have anyone else here. I honestly don't know what Rachel would do if I left.” And I don't know what I'm going to do if you stay.

「彼女には誰もいないんだ。天涯孤独のうえに、こんな病気になってパニックになっ

ている。おれ以外にすぎる相手はいないんだ。もしおれが見捨てたら、彼女は何しでかすか分からない。それが正直なところだ」〈あなたが戻らなかったら、わたしだってどうなるか分からないわ〉 — [Sky]

(20)(21)とも、前文の直接話法から and を合図に話法が転換され、伝達部のない直接話法の自由直接話法で登場人物の思考が表されている。

ちなみに、now も転換のマーカ―となるが、通例何らかの日本語で表現される。

(22) The man was about to protest about the barter but the boy stared at him fixedly in the eyes, the way he had seen his father do so often. The stallkeeper backed away and only bowed his head.

Now, what else did his mother want? He racked his brains. A chicken, raisins, dates, figs and … of course, two pomegranates.

男がそれでは少なすぎると抗議しかけると、少年は父親がよくやるのをまねて、相手の目をじっとみつめた。屋台の主は尻ごみして深々と頭を下げた。

さて、母親はほかになにを買ってこいといっていたか？彼は懸命に思いだそうとした。鶏を一羽、乾葡萄、無花果、棗…そうだ、柘榴二個だった。 — [Miracle]

疑問文の語順は直接話法のままで、ダイクシスと時制は間接話法の要素である自由間接話法である。ここでは「さて」と訳されている。

(23) “This is just between us.” “I understand.” The line went dead. Now there are three possibilities, Dana thought.

「いまの件はわれわれふたりだけの話にしておいてください」「分かりました」相手の電話を切る音がダナの耳に響いた。彼女は興奮する自分を抑えながら情報を分析した。〈すると、三つの可能性があるというわけね〉ダナは頭の中でかぞえあげた。 — [Sky]

間接話法ならば “Dana thought that there were three possibilities.” となるべきで、時制が直接話法のままで、伝達部も直接話法的に付加されている自由間接話法である。ここでは「すると」と訳されている。

話法転換の合図となる場合、and では先行発話・思考や記述に and 以下が付加され

るニュアンスがあるが、**now**では先行発話・思考や記述をもとに次の段階へ移行するニュアンスがある。

#### 4. おわりに

談話標識の **now** と **and** を例に、日英語の談話構成や表現法の違いを見てきた。**now** は一連の談話の局面が移行し展開する合図となるが、日本語ではその合図は言語化されずに談話が進むことが多い。**and** は単なる「付加・継続」の機能を超えて、書き手の強い主張を表すマーカーとなり、日本語では「ノダ」体で表されることが多い。さらに、話法転換の合図としても機能する。日本語の場合、談話における視点の移動は比較的自由になされるが、英語では日本語ほど自由ではない。そこで、話法が転換されることを知らせる **and** が用いられるのではないだろうか。

日英語では、文脈構成の方法や文脈情報を言語表現に取り込む様式が異なる。さらに広く詳細な検討が必要ではあるが、日本語は英語よりも文脈依存の程度が高く、一方、文脈を言語化する程度は英語の方が高い傾向があると言える。

日英語の談話を比較する場合、文（発話）と文（発話）がどのようにつながり展開するかは重要な要因である。談話標識は日英語の談話の構成や展開を解明する一つの項目である。

#### 注

- 1 松尾(2008, 2009)を参照。
- 2 時を表す副詞と談話標識の境界は曖昧である。両者の区別の目安としては、時を表す副詞は通例文頭以外で用いられ、強勢が置かれる。談話標識は通例文頭で用いられ、無強勢で独立した音調単位を成し、**well**, **then** のような他の談話標識と共起可能である(Aijmer pp.58, 60-62; Schiffrin 1987, p.231; Quirk *et al.* p.1608)。
- 3 Schiffrin (2006, p.333)は、このように談話標識はしばしば同時に複数のレベル(domain)で機能するが、通例いずれかのdomainが優先されるとする。詳細は同書及び、Schiffrin (1987)を参照されたい。
- 4 Blakemore (2005, p.1172)には次のような記述がある。[speaker finds bunch of flowers and card on the table] “*And I thought she'd forgotten.*” ここでは話し手の態度、安堵感、あるいはおそらくは恥ずかしいと思う気持ちが表されるとする。**and**がない場合とある場合とでは何らかの違いがあるはずだが、**and**によって話し手の態度が表されているのかどうかは、今後考えていきたい。なお、



Blakemore は関連性理論の立場から談話標識を分析している。

- 5 英語では次例のように、挨拶のあと本題に入るやりとりでしばしば **and** が用いられる。この **and** は相手の発話を受けて談話を継続している合図となると同時に、話し手が相手に対して興味を持っていることを示す感情的なニュアンスが示されていると言えるかもしれない。

(1) Dana's next stop was Detective Phonix Wilson's office. "Good morning, Detective Wilson." "And what brings you to my humble office?" —[*Sky*]

(2) At two o'clock the following afternoon, Rachel had an appointment with Dr. Graham Elgin. "Good afternoon, Dr. Elgin." "And what can I do for you?" — [*Sky*]

- 6 野田晴美. 1997. 『の(だ)の機能』 p.92 (東京：くろしお出版)による。

- 7 自由間接話法では直接話法の形のまま保持される語彙がある。たとえば、間投詞、原話者の評価を表す *poor* (可哀そうに)、*damn* などの表現、*no*、*after all* などの談話標識などである。これらは全て、発話を報告している者ではなく原話者の主観を表す表現であり、「口語表現のマーカ―」でもある (McHale p.269)。

## 参考文献

- Aijmer, K. 2002. *English Discourse particles: Evidence from a corpus*. Amsterdam: John Benjamins.
- Asher, R. E., et al. (eds.) 1994. *The Encyclopedia of Language and Linguistics*. Oxford: Pergamon Press.
- Biber, D., S. Johanson, G. Leech, S. Conrad & E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Blakemore, D. 2005. "and-parentheticals." *Journal of Pragmatics*. 37(8). pp. 1165-81.
- Carter, R. & M. McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cerco-Murcia, M. & D. Larsen-Freeman. 1999<sup>2</sup>. *The Grammar Book*. Rowley, Mass.: Newbury House.
- Fraser, B. 2009. "Topic Orientation Markers." *Journal of Pragmatics*. 41. pp.892-98.
- 小西友七(編). 1989. 『英語基本形容詞・副詞辞典』東京：研究社。

- Leech, G. N., B. Cruickshank & R. Ivanič. 2006<sup>2</sup>. *An A-Z of English Grammar & Usage*. Harlow: Pearson Education.
- Leech, G. N. & J. Svartvik. 2002<sup>3</sup>. *A Communicative Grammar of English*. London: Addison-Wesley.
- 松尾文子.1996.「英語と日本語の話法」『英米文学研究』第32号. pp.113-30. 梅光女学院大学英米文学会.
- 一. 1997. 「話法で何が伝えられるか—直接話法、間接話法、エコー発話としての自由間接話法」『「こころ」から「ことば」へ「ことば」から「こころ」へ』 pp.87-100. 佐藤泰正(編). 東京: 笠間書院.
- 一. 1997. 「英語の自由間接話法と日本語の中間話法」『英語表現研究』第14号. pp.49-57. 日本英語表現学会.
- 一. 2008. 「談話辞 actually の機能の展開」『論集』第41号. pp.78-88. 梅光学院大学紀要編集委員会.
- 一. 2009 「英語の談話標識の特性 及び 日本語との比較」『論集』第42号. pp.30-44. 梅光学院大学紀要編集委員会.
- McHale, B. 1978. “Free Indirect Discourse: A Survey of Recent Accounts.” *A Journal of Descriptive Poets and Theory of Literature*. 3, pp.249-87.
- 水谷信子. 1985. 『日英比較: 話しことばの文法』東京: くろしお出版.
- 名嶋義直. 2003. 「ノダカラの意味・機能—語用論的観点からの考察」『語用論研究』第5号. pp.17-30. 日本語用論学会.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 一. 2006. “Discourse marker research and theory: revisiting *and*.” In K. Fischer (ed.) *Approaches to Discourse Particles*. pp.315-38. Amsterdam: Eslvier
- Swan, M. 2005<sup>3</sup>. *Practical English Usage*. London: Oxford University Press.
- 内田聖二. 1998. 「『(の)だ』—関連性理論からの視点—」『現代英語の語法と文法』 pp.243-51. 東京: 大修館.

引用作品 ( )内は翻訳版

Archer, J. *The First Miracle*. (Coronet Books. 1980) (『最初の奇蹟』永井淳訳. 新潮社. 1987)

Grisham, J. *Skipping Christmas*. (A Dell Book. 2001) (『スキッピング・クリスマス』白石朗訳. 小学館. 2005)

Sheldon, S. *The Sky Is Falling*. (Warner Books. 2000) (『空が落ちる』天馬龍行訳. アカデミー出版. 2003)

一. *If Tomorrow Comes*. (Pan Books. 1985) (『明日があるなら』天馬龍行訳. アカデミー出版. 1988)

養老孟司. 『バカの壁』(新潮社. 2003) (*The Wall of Fools*. 豊島洋子・ステュウット A ヴァーナム-アットキン訳. IBC パブリッシング. 2005)